

香港のインドネシア人家事労働者による社会活動グループ参加と帰

国後のライフコースへの影響

天理大学 澤井志保

【目的】現在、国際移住家事労働者による各種社会活動がアジアの特定の地域で活発化している。移住先の地域で自助組織や自己エンパワーメント活動に参加した国際移住家事労働者は、自らの経験をどのように評価し、帰国後の生活で生かしているのだろうか。

たとえば先行研究においては、多くのインドネシア人国際移住家事労働者が帰国後には起業を試みるが、その場合、出身地域社会における社会的地位の低さやネットワークの欠如が彼らに不利にはたらくことが指摘されている。つまりここでは、国際移住家事労働者が移住労働中に培ったネットワークや知識などが考慮されていないのである。

これを踏まえて本発表では、前年度研究大会にて行った中間報告を発展させた最終報告として、香港にて社会活動グループに参加した経験のあるインドネシア人家事労働者への調査結果から、参加者は国際移住労働中の社会活動グループ参加で培ったネットワークや知識、経験などを得ているが、現時点ではそれらは帰国後の生活に限定的にのみ生かされている状況について考察する。

【方法】香港で家事労働者として働きながら、広義の社会活動グループに参加した経験のあるインドネシア人帰国者を対象に行った前年度の質問票調査結果に、追加インタビュー結果とキーワード分析を加えて深化させた。

【結果】大多数の回答者が香港在住時に複数のグループに参加しており、それぞれのグループ参加によって経済的、文化的、社会的、宗教的な価値を得たと回答した。しかしその一方で、回答者が経済的、社会的、宗教的に得たとする価値には一定の曖昧さや重複が見られた。このようなゆらぎについて追加分析した結果、このゆらぎは、回答者が社会活動経験の意義を移住労働中と帰国後では違った文脈で解釈していることに関連していることがわかった。

【結論】追加インタビュー結果から、回答者は、社会活動グループで得た価値を国際移住労働中、帰国時それぞれの社会状況に合わせて認識していることが見て取れた。その意味で彼らの移住労働中の社会活動への参加の意味は、出身国と移住国の社会的文脈双方に深く埋め込まれている。

移住先での社会活動は、参加者の国際移住労働中の生活と帰国後の生活をつなぎ合わせるとともに、国際移住家事労働の送り出し国と受入国の問題意識や価値観をも接合し、長期的に変えていく可能性をもつものとして重要である。その意味では、帰国後の国際移住家事労働者に、移住労働中に得た知識やネットワークなどを本人の出身社会の文脈で再解釈しつつ有効に生かせるような社会的サポートが有効であると考えられる。